

## 対馬海峡から見る台湾と八重山の「交流」

上 水 流 久 彦\*

### Taiwan and Yaeyama Islands: A Survey of Cultural Exchanges as Seen through Those of South Korea and the Tsushima Islands

KAMIZURU Hisahiko\*

Globalization and transnationalism are getting more attention in recent years as phenomena which challenge the concept of nation-state. The shift to some degree considers nation states to be an element to be overcome. In this article, the author examines how cultural and economic exchanges are taking place between Taiwan and the Yaeyama Islands in Okinawa, through the perspective of such exchanges between South Korea and the Tsushima Islands of Nagasaki Prefecture. In doing so, he attempts to shed a light on how the image of Taiwan as pro-Japan has weakened and disturbed the relationship between Taiwan and Yaeyama; this situation contrasts with how various mechanisms of mutual understanding have been constructed in the latter case, despite the backdrop of anti-Japanese sentiment in South Korea concerning the issue of sovereignty over Tsushima Island. Both Yaeyama and Tsushima are proud of their identities as being on the periphery, and are attempting to take advantage of these identities in promoting exchanges with Taiwan or South Korea in the course of regional development. However, in the Taiwan-Yaeyama case, the misunderstanding of each other's concept of "mutual understanding" has resulted in mutual discontent—despite the image of a pro-Japan Taiwan that has been long cherished by the Yaeyama side. In other words, this image is hampering the development of mutual exchanges. While the islands had enjoyed autonomy in pre-modern times due to being on the periphery, they are increasingly constrained by a nation where homogeneity is pursued, even as these areas attempt to demonstrate their unique identities.

キーワード：国民国家，越境，観光，八重山，対馬

Keywords: Nation-State, Transnationalism, Tourism, Yaeyama, Tsushima

---

\* 県立広島大学地域連携センター；Community Liaison Center, Prefectural University of Hiroshima, 7-6-304, Kaminobori, Nakaku, Hiroshima, 730-0014/  
kamizuru@pu-hiroshima.ac.jp

## はじめに

本稿では台湾と八重山の関係について対馬と韓国の交流・交易（以下、「交流」）を補助線に、前者の「交流」が弱い結びつきのもと推進され、親日台湾像がその「交流」を阻害していることを明らかにする。この作業を通じて、国民国家の枠組みを超えようという試みにおいてさえ、そのシステムが関係者の活動や認識を捉える様を指摘する。

近年、グローバリゼーションやトランスナショナリズム等の脱国民国家の現象に注目が集まっている [上杉 2004; 陳 2008]。トランスナショナリズムの概念を整理した上杉によれば、トランスナショナリズムは、(1) 複数の国の国境を越える現象であること、(2) 長期間継続する現象であること、(3) 規則的ないし頻繁に見られる往復運動であること、(4) 多元的帰属意識ないしネットワークが形成されていること、と述べる [上杉 2004: 20]。すなわち、一過性で一方的な移動ではなく、長期的かつ双方向的で脱国家的な現象である。

トランスナショナリズムの基盤がここ約 20 年で急速に進んだグローバリゼーションである。グローバリゼーションの時代には、人、モノ、資本、情報が国境を容易かつ頻繁に越えるとされる。そのような状況は交通網の発達、資本の自由化などを基盤に経済構造の一体化に負うところが多い。さらに、情報分野におけるインターネットの発達という IT 革命は、一定程度経済が発達しインフラが整備された地域におけるという限定付きであるが、そのような地域に住む多くの人々に、「On Demand」という欲しい時にいつでもどこでも情報が得られ、送ることができるという状況を授けた。すなわち場所と時間による拘束性の解体に基づくグローバルヴィレッジ時代の到来を予想させた。

だが、都市研究の一派からは社会資本の整備等の違いに基づいてそのような予想に対して、疑問が早くから呈された [カステル 1984; 植木 1996]。例えば植木はグローバリゼーションによって場所の非拘束性が進むはずなのにいまだにニューヨークや東京が中心地であるのはなぜなのかと問いかける。そのような疑問に対して植木は、些細な情報も含めた対面的な情報交換が情報の価値の創出には重要であることを指摘し、情報の流通は IT 革命では可能だが、意味の創出においては IT 革命が場所の拘束性を解体することは不可能であると述べる [植木 1996: 18-27]。

またトランスナショナリズムの理論を整理した大井は、越境的な空間がナショナリズムから自由ではないにも拘わらず、ポストモダンの解放の空間として考察されてきた問題点を述べる [大井 2006: 148-150]。上水流も本稿でも取り上げる八重

山における台湾人観光を事例に八重山の人々の自己認識と台湾の人々の八重山に対する他者認識とのズレ形成にみる国民国家の拘束性の強さを指摘し、「周辺」の情報  
が国家を超えて共有されない現状について論じた [上水流 2011]。

このように都市研究や移民・移動研究からは、ポストモダンの解放された空間  
として現代社会が想起されることへの疑問が出された。そこで本稿では国境を越  
えた「交流」によって「周辺」からの離脱を目指している八重山を事例に国民国家の  
拘束性を問う。なお、ここで述べる「周辺」とは地理的に日本の周辺に位置するこ  
とと、その地理的条件に基づいて政治的、経済的、社会的に日本国内において不利  
な立場にあるという当該地域に対する内外の認識を意味する。

## I 「周辺」を活かした自立を目指して

八重山も他の日本の中山間地域、離島の例に漏れず、産業が衰退し、人口減が進  
んでいる。八重山のなかで人口減が最も著しい与那国では現在の人口は 1700 人に  
も満たず、最盛期の 10% 余りである。高齢者の比率も高く、2006 年現在、高齢人  
口（約 20%）が年少人口（約 18%）を上回っている。

これまで八重山は離島振興に基づいて国から手厚い補助をもらっていたが、国家  
の財政的逼迫は補助金の削減を招き、自前で経済的基盤を確保することを八重山に  
も求めるようになってきている。加えて政府が推進しようとしている地方分権の流れは、  
地域の自立を加速するものとなっている<sup>1)</sup>。これらの点は 2010 年の 3 月に八重山で  
開催されたワーキング・シンポジウム「八重山と台湾の交流～観光促進のカギを探  
る」での地元の自治体、経済界からの参加者の発言から確認されたことでもあった<sup>2)</sup>。

そのような状況において台湾は地域発展の切り札として八重山では考えられてき  
た。台湾は石垣市から約 200 キロメートル、与那国からは約 100 キロメートル離れ  
ている。なお、那覇は石垣市から約 450 キロメートル、与那国からは約 580 キロメ  
ートルで、八重山が台湾に如何に近いかがわかる。年に数回は与那国から台湾を直  
接見ることができる。このような地理的近接性は身近に台湾があるという感覚を八  
重山の人々にもたらせてきた<sup>3)</sup>。さらに、植民地期や終戦直後の自由な往来とその

- 
- 1) 与那国町は台湾との連携に基づく特区申請を 2005 年、2006 年と続けて行った。ただ、採択されることはなかった。詳細は上水流 [2009]。
  - 2) 2010 年 3 月 27 日にトヨタ財団特定課題・海のアジアが醸成する文化として助成を受けた「沖縄と台湾の境界領域における越境実践と生活圏構築プロジェクト」（研究代表者 県立広島大学 上水流久彦）の一環として実施をした。
  - 3) 大日本帝国によって植民地として台湾がその領土に組み込まれる前は、敵対的な関係で

往来に基づく八重山の繁栄〔大浦 2002; 奥野 2005〕は台湾との「交流」を希求させる力となった〔上水流 2009〕<sup>4)</sup>。台湾との「交流」は八重山にとって「周辺」という独自性と強みの活用であった。

この台湾との「交流」は日本と台湾との友好的な関係や「親日台湾」像によって抵抗感なく人々に受け入れられている。特に政治的、経済的分野で「交流」を推進する台湾や八重山の要人は友好的関係を「交流」促進の基盤ととらえている。この点は後述するように、対馬と韓国との「交流」とは大きく異なる。

産業の衰退、自立化、友好的関係、往来による繁栄の記憶を背景に 2000 年代に入り、八重山では (1) 飛行機や船による直接の往来のための交通手段の確保、(2) 台湾からの観光客の誘致、(3) 貿易・工場の誘致・拡大が計画されてきた。だが、2000 年代初頭において、台湾との「交流」は希求されるものの、実際には「北（日本本土）」からの観光客を阻害しないような形で求められた。例えば 2002 年から 2003 年にかけて SARS（重症急性呼吸器症候群）が流行した時には、日本本土からの観光に悪い影響を与えないよう、台湾からの観光客の上陸を見合わせ、商店街のシャッターが閉められることがあった。あこがれの「南（台湾）<sup>5)</sup>」と現実の「北」である〔上水流 2009〕。

しかし、ここ数年急速に日本国内の景気が悪化するなかで地域振興の方策として台湾との「交流」が現実的に一層強く求められるようになってきた。石垣では台湾からのスタークルーズ船（後述）の受け入れに尽力し、与那国ではチャーター便の運航、与那国の港の開港運動が試みられてきた。なかでも台湾からの観光客の誘致が積極的に推進されるようになってきた。そこで以下では現在最も注力されている八重山における台湾人観光の受け入れについて見ていく。

## II 理想と現実のズレ：台湾人よる八重山観光にみるすれ違い

最初に摩擦を象徴するひとつの事件を紹介することから始めたい。その事件を筆者は「八重山そば拒否事件」と名付けている。基隆を基点に石垣、宮古島、沖縄本島（那覇）の観光を楽しむツアーがある。スタークルーズというマレーシアに本社

---

接触はほとんどなかったとされる〔又吉 1990〕。

4) ただし、植民地期の台湾との交流は、大日本帝国の大都市であった台北を中心とした「近代的大日本帝国を構成する台湾」との接触であり、したがって、台湾の人々ではなく、内地から来た日本人を相手にしたものであった。

5) 台湾は正確には日本の「西」に位置するが、ここでは本土におけるイメージと、本土の対比という点から「南」とした。

を置くクルーズ会社によって運営され、カジノが常設された船（以下、スタークルーズ船）の中で公海上それを楽しみ、昼は各寄港地を訪れるというものである<sup>6)</sup>。客の大半は台湾人<sup>7)</sup>で、石垣に初めて寄港したのは1997年3月15日である<sup>8)</sup>。

筆者が2004年の調査中に石垣で耳にした話が八重山そば拒否事件である。スタークルーズ船が就航した初期の頃、八重山の人々が台湾の観光客を迎えるにあたって、歓迎の意味も含めて約50名の台湾人に地元の名物料理である八重山そばを用意した<sup>9)</sup>。だが彼らはその料理に手をつけず、スーパーでパックのマグロの刺身や寿司を買って食べ、地元の好意や伝統文化を軽視したことから地元の人々の不評を買った<sup>10)</sup>。

この事件は異文化摩擦の象徴的な事件であるが、1997年のスタークルーズ船就航以降、八重山において八重山と台湾の間の異文化摩擦は多く見られた。まずトイレの使用法である。台湾において使用したトイレトペーパーは、流さずに便器そばのバケツに捨てる。このような使用方法を台湾人観光客が八重山で行い、八重山の人々のひんしゆくを買った。また台湾では魚や鳥料理の骨などの屑はテーブルやテーブル下に捨てるが、それも台湾の人々のマナーの悪さとされた<sup>11)</sup>。

さらに「台湾人は手癖が悪い」という認識も広がった。過去、台湾の人が万引きをしたという事実を筆者は1件聞いているが、そのような事件からこのような認識が広がった。2009年2月に与那国では台湾人観光客を受け入れたが、その時に台湾通とされる人物から「台湾の人は手癖が悪いので、店番を2人置きなさい」との助言が出たという。八重山では台湾人観光客が来るとシャッターを閉める店も出た<sup>12)</sup>。これらに加えて料理や土産でミスマッチが発生した。八重山の料理ではなく、和食

---

6) 2009年度以降は宮古島を訪ねるツアーはない。台湾人観光客の評判が良くなかったためである。

7) 台湾において、「台湾人」とは誰であるかという問題がある。先住民族の権利確保や、与野党の対立のなかで台湾に元々住んでいた先住民族を指すこともあれば、特に意識されることなく（意識されないことが逆に問題だとする者もいる）、台湾人口の大半を占める閩南人を意味することもある。さらに中華人民共和国との政治的対立のなかで、台湾の独立や主体性の確保を主張する者を、統一や中華人民共和国との関係改善を主張する「中国人」と対比するなかで「台湾人」と呼称することもある。したがって、「台湾人」という呼称は慎重に使うべき用語であるが、本稿では単純に中華民国籍を持つ台湾在住の人々と定義しておく。

8) 八重山毎日新聞社・松田良孝氏による。

9) 石垣には他にも名物料理があるが、大勢の人数に対応できる安価な料理としては八重山そばしかないというのが、八重山そばを出した理由であった。

10) 2009年の調査時においても同様の姿を見ることができる。

11) この点は相互理解の結果、現在解消した。トイレに関しては対馬でも同様の問題が発生した。

12) 宮古島でも同様の話を聞いた。

チェーン店でうどんやそばなどを食べる、八重山独自の土産ではなく、菓や大手菓子会社の菓子を買うという現象である。

上記の状況のなか八重山の人々において台湾人への不満が蓄積された。結果、台湾人について「うるさい、ルールを守らない、お金を落とさない」などの評判が八重山で広く立つようになった。このようなすれ違いの要因として台湾と八重山の間で一致しない八重山像と台湾像がある。それらの点を以下では具体的に見てみよう。

### III 交わらない八重山像

台湾における八重山像だが、結論を先に述べれば、具体的な八重山像は台湾に存在しない。日本もしくは沖縄の一部と思われている。沖縄の一部といっても日本の一部という要素が強い。

例えばスタークルーズ船の観光客に石垣について聞くと、下船する直前に知ったと答える者もいる。さらに石垣市観光協会が設置したインフォメーションで、「国際通りはどこか」と聞いた者もいた（国際通りは実際は那覇にある）。インフォメーションで対応する台湾人華僑は、台湾人が石垣の情報をほとんど知らないと感じている。

筆者は台湾東部の人々に八重山について印象を尋ねたことがある。石垣や与那国が台湾東部の自治体と姉妹都市を結んでいることから、「名前は聞いたことがある」という人がたまにいる程度であった。美しい海があり、日本では観光地として有名であることを知る人はほとんどいなかった。与那国についてはこのようなこともあった。2008年8月14日に沖縄県の支援もあり、台湾の大手新聞『聯合報』に八重山観光の記事が全面で紹介された。そこに台湾と沖縄の地図が掲載されたが、与那国島を見ることはできなかった。掲載が忘れられていた。

沖縄という単位でもその独特な文化が台湾で伝えられているかということ、これも危うい。例えば、60歳前後のある女性は、お金をためて日本旅行に行くことを愉しみにし、これまで3回日本に出かけている。いずれも旅行先は沖縄であった。だが彼女は沖縄を選んだ訳ではない。安くて近い日本で探すとして沖縄になったのであり、彼女は「日本はどこも同じだ」と思ったぐらいであった。沖縄という地名こそ一般的に知られているが、そこに「何があるのか」となると、日本で知られているほど沖縄独自の情報が台湾で流れているわけではない。

このように見てくると、台湾の人々が八重山に独自なものを求めていることは明確である。台湾の人々が日々浴びるテレビを中心としたメディアの情報は東京や

台北で生み出される東京、北海道、京都などの「日本」で、八重山がそれらのなかで取り上げられることはほとんどない。書店にも八重山を紹介する雑誌は東京や京都などの雑誌とは異なり、全く並ばない。したがって彼らが八重山観光で八重山に期待するものは「日本」なのである。八重山そばではなく、日本そばやうどんを台湾人観光客は求める。

土産も同様である。写真1は台湾の人が宮古島で買ったお土産のレシートである。買われている商品は大手菓子会社の菓子が中心である。写真1は一例であるが、菓や菓子を買う傾向は台湾の観光客に広く見られる。2009年に与那国町の企画で台湾人観光客が与那国を訪れたが、アンケートに対する彼らの回答には食事と同様に日本的な土産を求める声が多く存在した。

しかしながら八重山の人々は台湾において八重山像があると認識し、台湾の状況を正しくは理解していない。例えば台湾を紹介する講座を筆者は石垣市で行ったことがある<sup>13)</sup>。そこで台湾の人々が買う土産は何かと思うかと高校生に聞いたところ、ちんすこう、シーサーなどが挙げられた。このような傾向は高校生に限ったことではない。与那国の業者も長命草を使った与那国独自の土産を開発し、売りたいと考えていた。

また前述したように八重山そばをスタークルーズ船の客に出すことが一般的である。八重山の受け入れ側はそれを台湾の人々の要望に応えるものと思っている。うどんでも一挙に大量に出せるのだが、八重山そばを出すところに八重山側の人々の認識を見ることができよう。



写真1 台湾の人が宮古島で買ったお土産のレシート

13) トヨタ財団「沖縄と台湾の境界領域における越境実践と生活圏構築プロジェクト」の一環として2010年10月4日に実施した。高校生から一般市民まで20名近くの参加者があった。

このような八重山の人々の思いは自らの成功体験に裏付けされていた。八重山の人々はこれまで八重山に来た観光客を相手に何が売れるかを知っていた。本土からの観光客は当然ながら「日本」のモノではなく、八重山独自の土産品を買いに来ていた。非「日本」であることが観光戦略上も自己アイデンティティでも重要であった。

実は八重山の国内観光での成功体験こそが台湾人観光客受入の失敗の要因と言える〔上水流 2011〕。観光人類学を研究する橋本によれば、観光とは「異郷において、よく知られているものを、ほんの少し、一時的な楽しみとして、売買すること」〔橋本 1999〕である。この指摘は台湾人観光客を対象とした「八重山」観光の不成立に見るように本稿の事例にも該当する。ここまで見てきたように台湾で「よく知られているもの」は典型的な「日本」のモノで、八重山について「よく知られているもの」は台湾にはほとんどないからである。

だが日本本土からの観光客を対象にした観光文化の売買を通じて、八重山の国内向けの自画像は日々強化されていく。日本本土とは異なる文化が八重山にあるという認識がある。さらに沖縄においても八重山は沖縄本土とは異なっているという認識がある。そして、その違いを売りに特に日本本土の人間に対しては観光文化を売買してきた。日本本土の和食屋で提供されるさしみではなく、八重山そばや独特のてんぷら、チャンプル、パイナップルなどの島のフルーツ、島ラー油を使った食べ物、石垣牛のステーキ等を作り、八重山諸島を船で巡り、のんびりゆっくり過ごす時間を提供してきた。さらには沖縄本島よりも美しいとされる海で過ごす時間を観光の目玉としてきた。日本本土からの観光客はそれらを求めて、八重山に来るのであり、それが八重山らしさであった。

「ネーション」の成立を論じる内堀は、ある集団<sup>14)</sup>が名乗り、その名付けを他の主体が認証することで「ネーション」が成立すると述べる〔内堀 1989〕。そのような関係は単純に何と名乗るかという「名前」だけの問題ではない。観光における販売という日々の日常行為そのものによる名乗りと、その行為を意味あるものとして認める名付け（観光であれば、観光客が楽しむ、買う、評価するという形で）も、「名乗りと名付け」の関係に含まれよう。

日本国内を市場とする観光産業として八重山観光が成功していることは、その国内での名乗りと名付けがうまく循環し、成功していることを意味している。名乗り（八重山の人々が「八重山文化」を売る行為）と名付け（日本本土の観光客が「八

---

14) 内堀は集団という用語をいわゆる民族だけに限定はしていない。



重山文化」を買う行為)の日々繰り返される反復活動が、八重山の人々において国内市場で生まれる「八重山文化」のイメージの内面化に深く作用することは想像に難くない。日々の反復活動によって国内における八重山像に基づく八重山の人々のアイデンティティ、自画像は強化される。

しかし、その自画像は台湾における八重山像という他画像とは異なる。台湾において「八重山」という明確なイメージは存在せず、「八重山」はテレビや雑誌で取り上げられる「日本」イメージによって形成される。したがって日本という国民国家内部の観光で形成された八重山の自画像は台湾では共有されない。そのため国内の観光市場における自画像を強く持つ八重山の人々は、台湾での実情を知らず、「八重山」＝「日本」の一部という台湾人観光客の八重山像が理解できない。ここに両者の間のズレが生じる。

国民国家は人的ネットワークや空間の非均質性、構成員の非同質性、不平等性を特徴とする封建国家とは異なり、領土という空間を基盤に空間内部の均質性、構成員の同質性、対等性をその特徴とする。それ故にメディアによる想像の共同体〔アンダーソン 1997〕としての国民国家が成立し得る。このことは裏返せば、国民国家内部と外部で空間や情報が切断されることを物語っている。

冒頭で見たようにIT革命は情報の流通という点において、国民国家という枠組みを無効にし、脱国家していくとされた。だが本稿の事例は情報の流通という点においてさえも国民国家という枠組みを乗り越えることが容易ではないことを示している。八重山、台湾はIT革命を受け、インフラが整備され、両者の間に観光というアーリーナが存在する。それにも拘わらず、単なる情報さえも越境しない状況がそこに生じている。

台湾で流れる情報は東京や大阪、京都、北海道などの日本国内でも有数の中心地、観光地のものである。台湾の情報の日本への流通も然りである。それは国民国家における中心と中心の情報の流通であり、本稿の事例のように国民国家の「周辺」に位置づけられる場合、情報の流通は容易ではない。安易なトランスナショナルリズム議論への批判的再考が必要な所以である。

#### IV 発展途上国としての台湾像

次に八重山における発展途上国としての台湾像が招く文化摩擦について見ていく。八重山における台湾像は、主に親近感、昔の誤った情報、差別感情に基づいて形成

されている。まず親近感だが、台湾について最も強調される点は「近さ」である。「近さ」は2つある。ひとつは地理的な「近さ」である。最も近い外国という声は八重山の政財界から草の根活動をする人々まで広く聞かれる声であった。もうひとつが心理上の「近さ」で、親日台湾、台湾と日本の友好的な関係である。台湾と日本との関係に関するこのような認識は八重山の一般的な人々にも広く見られる。

だが、その「近さ」が正確な台湾情報を八重山にもたらすとは限らない。八重山に伝わる台湾の情報は、基本的に発展途上にある遅れた発展途上国の台湾像である。例えば、那覇、石垣と基隆を結ぶ乗客船に乗って台湾へ旅行した時の記憶から、「タクシーがぼろぼろで、車は汚く、すぐ遠回りをしてお金を騙そうとした」、「道路は舗装されておらず、ガタガタだった」等と語る者がいる。八重山で筆者が聞く限り、1980年代から1990年前後までがその記憶の中心である。そこでは発展途上国台湾のイメージが強い。

現在、八重山の人々を安価な値段で台湾へと運んだ航路はなくなり、台湾が経済的に発展し、旅行代金は高くなった。台湾に行く機会は以前に比べて格段に少なくなった。そのため当時台湾に行く機会が多かった50歳以上の、特に男性の上記のような記憶の更新はほとんど行われない。

発展途上国の台湾というイメージにはサトウキビ刈り時代の記憶も関係する。日本政府に沖縄が返還されるまでは、台湾からも出稼ぎに来る者も少なくなかった。台湾からの出稼ぎは、きつい労働への従事や質素な服装から貧しい台湾を想起させた。このような台湾像は現在も50歳以上の人々の記憶に残り、万引きをする台湾人観光客という噂が広く流布する背景になっている。貧しいが故に物を盗むという考えである。

発展途上国の台湾像は八重山も含む先島諸島で一般的だと思わせる事例がある。宮古島のある中学校は台湾西部にある中学校と姉妹提携を結び、毎年交流を行っている。2010年度は宮古島の生徒が台湾に出向いたのだが、台湾に行った生徒の感想は「大都会台湾であった」という。行くまで台湾に大きなビルディングがあり、地下鉄などがあるとは思わなかったと、引率した教員が学生の感想を筆者に伝えてくれた。毎年交流をしている学校の学生でさえ正確な情報は得ていない。

台湾には現在、高級デパートがいくつも点在し、世界のブランドが売られている。台湾には三越、そごうなどの日系百貨店が多く出店しており、日本の地方都市では販売されていない一流ブランドが売られている。また地下鉄が整備され、それに伴い地下街も作られ、スターバックス等のカフェが入り、日本の大都市と変わらない状況がある。1990年代半ばとは異なり、フランス料理やイタリア料理の高級レスト

ランも多く、週末になると多くの台北の人々がそれらを堪能している。さらに 2000 年代に入り、台湾では観光が根付くようになり、台湾各地にリゾートホテルがオープンし、外国人ではなく台湾人が楽しむものとなっている。このような情報は八重山に伝わっていない<sup>15)</sup>。

八重山におけるこのような現状はスタークルーズ船で来島する台湾人への接客レベルと一緒にあって、台湾から移民した八重山住民に大きな不満を招いている。以前、スタークルーズ船で来る観光客のガイドをしていた人物は、案内されるところが無料のところばかりで良い八重山を見せていないと怒っていた。現在、彼はそのような接客を見ることが嫌になり、ガイドを行っていない。

別の台湾系住民のガイドは料理について問題があると述べる。以前は団体の台湾人観光客に供される食事は八重山そばだけであり、どんなに美味しいものが他にもあっても食べることができなかったという。2009 年から石垣牛のステーキや伊勢エビの鉄板焼きなどを選ぶことができる団体ツアーも出てきた。だが、それでも八重山そば、ステーキなどメニューごとに座席が供する側の都合で分けられており、家族で食べるものが違えば、別々に座らなければならない現状に腹を立てていた。さらに相互理解をするための勉強会や八重山の華僑の組織と協力することさえないと嘆く。市役所間の姉妹都市縁組を除けば、他の組織が姉妹縁組を結ぶことがないことにも不満を覚えていた。

別のスタークルーズ船の観光客受け入れ側スタッフ（台湾系住民）の 1 人は、一昨年前まで観光案内さえなかったと述べた。個人客は下船したら降ろされるだけで何ら対応がなかったと語る<sup>16)</sup>。現在、通訳をする公的サービスもなく、個々の業者に任せられているだけである。その場合も大手の企業 2、3 社がわずかに対応するだけで、ほとんどの場で対応はとられていない。クルーズ船就航から 10 年近く経つ 2008 年でさえ、筆者の調査において通訳サービスは確認できなかった。このような接客態度から台湾人観光客が十分に尊重されていないと彼女は感じ取っていた。

上記のような扱いとは裏腹に台湾人観光客の経済的価値はこの 5 年間ほどで大き

- 
- 15) 一方で、花蓮市のあるインフォーマントは、「与那国の生徒が花蓮に来ると、こちら（花蓮）が都会でびっくりするでしょう」と語ったことがある。また石垣に行った台湾の間人も町が清潔であること（台湾における日本の典型的イメージ）を除くと、石垣に関する印象は「昔ながらの建物がある」などであり、そこに先進性を見出して驚くことは少ない。このような台湾人の八重山へのまなざしは、八重山の人々と共有されていないように見受けられる。
- 16) 現在はインフォメーションが仮設のテント場におかれている。これも宮古島市ではすでに対応が取られていることが八重山毎日新聞で取り上げられ、それを契機に設置されたということであった。

く向上している。日本人観光客は現在 70 万人ぐらいであるが、大きく減っており、2010 年度は昨年度比 3 割減という話もある。そのなかで年間 6 万人ほど訪れる台湾人観光客の価値は相対的に上がっている。実際、台湾人観光客に感謝する観光関連会社の人は多い。なかでもタクシー運転手はその典型である。2005 年頃台湾人観光客をありがたがる運転手は筆者の調査においてほとんどいなかった。だが、現在は、「台湾さまさまだ」や「台湾は景気がいいんだね」、「台湾のお客さん無しでは、石垣のタクシー会社は大変だ」等と多くの運転手が語るまでになっている。

2007 年 9 月 21 日から台湾の運転免許証が日本で使えるようになって、レンタカー会社も繁盛している。特に昨年度の調査からその声を聞く。スタークルーズ船が到着する日は車が足りないような状況である。さらにドラッグストアにおいても到着日には台湾の人々が溢れ、地元の人がその時間帯に買い物に行くのを遠慮するぐらいである。通常の 5, 6 倍の売り上げになると店の人は語る。このほか石垣市のアーケード街でお土産店を開いている女性は、団体バスをスーパーやドラッグストアがあるモールだけではなく、アーケード街にも寄らせて欲しいと語っていた。アーケード街関係者の特定の人の不満だけで台湾人観光客が来なくなったのは困るという。万引きすると台湾人観光客が敬遠されていた時は大きな違いである。

このように八重山において台湾人観光客の経済的価値は向上している。その受け入れは台湾と八重山の「近さ」から歓迎されている。だが、その対応には通訳サービスが不十分、相互理解の機会がない、「安ければ良い」など、相互間の情報の不確かさや発展途上国の台湾というイメージによって問題を抱えている。それが現在の八重山における台湾人観光客受け入れの実情である。

## V 対馬にみる韓国との「交流」活動

このような八重山と台湾の「交流」は、近年韓国人観光客を八重山と同程度の人数を受け入れている対馬と韓国との「交流」と比べるとどのように見えるのだろうか。ここでは両者の「交流」について概観してみよう。対馬も国境の島として日本の「周辺」にあり、その点では八重山と似た状況で外国人観光客を受け入れている地域である。釜山から対馬まで最短で約 50 キロメートル、交流活動の中心で市役所がある厳原まで約 100 キロメートルである。対馬市の現在の人口は、約 3 万 6000 人で、最盛期 1960 年の約 7 万人の半分となっている<sup>17)</sup>。なお、2005 年現在、高齢

17) 人口等の資料は合併前の厳原町の助役である橋厚志氏にいただいた。感謝申し上げます。

人口約 26%，年少人口約 15%で与那国町よりも差は大きい。

対馬における韓国との「交流」の特徴は簡単に述べれば、監視され、心配されるというものである。そこには反日韓国像が影響している。筆者の授業を通じて韓国の印象を学生に聞くと、その多くが「反日」というものである。これは対馬においても同様であった。対馬高校の生徒は毎年韓国釜山を訪問するが、その印象は釜山が大都市であることや発展していることに対する驚き（すなわち発展途上国としての韓国イメージが先入観であることへの気づき）の他に、「意外と親切だった、良かった」というものである。「意外」という言葉の裏側には韓国は反日的であるという理解を読み取ることは難しくない。対馬の一般の人々にも同様な理解を見ることができた。

この点は韓国における対馬の知名度が高い理由とも関係する。韓国において対馬の知名度は高いが、その理由は領土問題である。「テマド（対馬島）」として認識される対馬だが、韓国の対馬認識を調査している中村によれば、その内容は「テマドは我々の領土」、「以前、自分たちの領土だったという認識（和冠征伐）」、「韓国の自然と歴史が息づく島（東亜日報社）」というものである<sup>18)</sup>。筆者自身も対馬で、2008年秋に「テマド（対馬島）は我々の領土」と書かれた文字を見たことがある。2005年には島根県議会の「竹島の日」に対抗して馬山市が「テマド（対馬島）の日」を制定したこともあった。

これらのことを背景に対馬、さらに日本の一部では、韓国資本による対馬の不動産購入、ホテルの建設・運営や大量の韓国人観光客の来島（人口の倍近くの約 6 万人の韓国人が年間に訪れている<sup>19)</sup>）に対して反発する声があがっている。対馬が韓国に乗っ取られるというのである。そのため、右翼系活動団体が街宣車を走らせ、保守派議員団による視察が行われ、対馬が韓国のものにならないよう監視が強められている。ある議員視察団の一議員は、アリラン祭（後述）の旗に書いてある韓国と対馬の地図がともに同じ黒色で塗られていることに気づき、「これでは対馬が韓国の領土みたいだ」とアリラン祭の実行委員に注文をつけた。この他、幾つもの行政視察においても、そのような現状に対して心配がなされると、対馬市役所のある職

---

18) 上水流が代表を務める科学研究費補助金基盤 (B)「日本「周辺」地域にみる国境変動とアイデンティティ：韓国・台湾との越境を巡って（課題番号：21320165）（以下、越境科研）」での 2010 年度研究会報告（2010 年 10 月 30 日）における中村八重（韓国外国語大学校）「中間報告：韓国人観光客と対馬認識」に基づく。

19) 東京ディズニーランドがある浦安市は人口 6 万 5000 人に対して、年間 1 千万人以上、人口比で約 153 倍の観光客を受け入れている。そのような比率から考えると、後述するように対馬市全体が韓国人観光客によって潤うとは言い難い。なお、浦安市の事例は査読者からご教示いただいた。

員は筆者に語った。

このような監視と心配は結果的に対馬と韓国との「交流」を厚みのあるものにしてきている。自らの「交流」の内容を他者に納得させ、その根拠を示すためである。その「交流」の根本となるものが、歴史、特に近代以前の歴史である。1980年代以降、朝鮮通信使が対馬を特徴づける材料として取り上げられ〔村上 2007; 小田 2010〕、それを「交流」を推進する関係者は韓国と共有できる友好的歴史、「親善」として取り扱っている。対馬と韓国との「交流」を調査する村上は、対馬の自己イメージ、他者イメージが「要塞」→「辺境」→「国境」→「交流」の島と変遷してきたと指摘する〔村上 2007〕。具体的には李氏朝鮮と江戸幕府を結んだ雨森芳洲になぞらえるように、「交流」推進者は対馬を日本と韓国との仲介者として位置づける。

仲介者としての対馬像は、過去、日本と韓国との間にあった事実である。だが、過去の対馬と韓国との関係が全て掘り起こされて、「交流」活動に組み込まれていない点には留意しておく必要がある。対馬には植民地期に朝鮮半島出身者が住んでいた。昭和 25 (1950) 年頃は 4,000 人ほどのいたとされる<sup>20)</sup>。彼らは商業に従事するか、炭焼きをしていた。特に炭焼きをしていたことが、対馬の高齢の人に話を聞くと出てくる。だが、このような歴史が「交流」活動において取り上げられることはない。また植民地期、対馬北部の上対馬では釜山との往来が盛んであったが、そのこと自体に焦点があてられることは現在の活動においてない<sup>21)</sup>。「親善」の歴史が掘り起こされ、選択されている。

韓国との「交流」は主に対馬市（合併前は厳原町）が中心となって推進してきたが、現在その「交流」の輪は様々な組織に広がっている。例えば対馬高校や中学校は、釜山の学校と姉妹校協定を結んでいる。この他、厳原の郵便局や、写真、スポーツクラブなどが同じく釜山のそれぞれの相手と姉妹関係を結び、活動を行っている。このような動きは盧泰愚大統領が雨森芳洲に言及した 1980 年代から徐々に進むが〔村上 2007; 小田 2010〕、韓国の船会社である大亜高速海運が釜山と対馬を結んだ 1999 年から一層促進される<sup>22)</sup>。

韓国と関係する多彩なイベントも行われている。代表的なものには例えば、8 月

20) 橋厚志氏にご教示いただいた。

21) なお、越境科研の研究分担者である村上和弘（愛媛大学）によると、1990 年代の韓国との交通ルートの確立を対馬で最初に求めたのは、現在交流活動の主要舞台となっている対馬市役所がある厳原ではなく、植民地期に往来があった上対馬であったという。

22) 大亜高速海運の就航において地元から強い反発があった。関係者の話によると、ほとんどのホテルが韓国人観光客の受け入れに非協力的であり、大亜の船の接岸を受け入れる海運会社も存在しなかった。最終的には接岸を受け入れる海運会社を新たに設立した。

最初の週末に実施される「厳原港まつり・対馬アリラン祭<sup>23)</sup>」、韓国のミュージシャンを招待して行われる「チング音楽祭（チングとは朝鮮語<sup>24)</sup>で友だちの意味）」、韓国の選手も参加する「国境マラソン IN 対馬」などがある。

これらのイベントや韓国人観光客を受け入れるために様々な対策も実施されている。列挙すると以下のとおりである。(1) 観光に関わる韓国と対馬の関係者による意見交換会の実施、(2) 朝鮮語による説明（スーパー、温泉等）、(3) 韓国人観光客が頻繁に利用するスーパー等における朝鮮語通訳の配置、(4) 市役所国際交流員への韓国人配置、(5) 韓国の大学への進学支援、(6) 韓国の高校、大学との交流を念頭に置いた対馬高校国際文化交流コースの設置、(7) 対馬市による対馬釜山事務所設置などである。民間においては、簡単な朝鮮語であるが、(8) 朝鮮語で商売する人々も現れるようになってきている<sup>25)</sup>。

ただ対馬と韓国の「交流」において問題がないわけではない。例えば、韓国の正確な情報は対馬では広まっではない。対馬高校の学生が韓国に行って自分たちの先入観と実際との違い驚いたように発展途上国というまなざしは、韓国に関係するような人々の間においても一般的である。

また「韓国と交流しても儲からない」という考えも現在なお根強くある。厳原町のホテル、バス会社などは利益をあげているが、彼ら以外の人間には儲けはなく、むしろ温泉でのルールを守らない、道で飲み食いするなど韓国人のトラブルが増えたと考える人々がいる。対馬と韓国・釜山との「交流」の基盤となっている朝鮮通信史を知らない対馬市の職員も存在する。行列に携わることが少なかった旧厳原町以外の町役場出身の職員はそうであるという。様々な交流イベントや対応策がある割には、なかなか韓国との「交流」に理解が進まない「交流」における中心的人物は語る。

このような対馬と韓国・釜山との「交流」の特徴を一言でまとめれば、「反日」と「親善」の相克である。「反日」というイメージの強い韓国と、「親善」という対馬藩の行った理念に基づく「交流」は、その「交流」を促進したい者と「乗っ取られる」と反対する者との間に存在する。

韓国における対馬認識では、ナショナリズムが前面に出る。「テマド（対馬島）」という領土問題の島という形で対馬は韓国でクローズアップされていた。そのため

23) この祭りの名称や実施団体については村上（2009）に詳しい。

24) 韓国の国語である韓国語、韓国以外の地域の朝鮮族が使用する母語の総称として、朝鮮語を用いる。

25) 筆者は、上対馬の韓国展望所でそのような販売者を見た。

韓国において対馬の実情は伝わっていなかった。韓国人観光客は対馬に来てみて「何もない」と感じ、もう2度と来ないという感想を持つ者もいるという。またもう少し都会だと思っていた者もいるという。事前に対馬について情報を集めて来る者も少ない<sup>26)</sup>。

韓国人観光客の多さのもと、乗っ取られそうな対馬という印象だけがメディアを通じて日本で広がり、日常の対馬が無視されていると不満を覚える対馬住民は多かった。韓国と対馬の「交流」において最も象徴的なイベントである厳原港まつり・アラン祭だが、それは厳原の人々においては通常「港まつり」として呼称されている。現地の人間が韓国の要素を重視し深く意識しているわけではない。祭りのプログラムにおいても、朝鮮通信使行列や国書交換、韓国舞踊団の公演などがあるが、2日間にわたる祭りのうち、それら以外の催しは地域住民の日頃の文化的活動の披露であり、ゲーム大会である。筆者は2009年、2010年とこの祭りの全てのプログラムを見たが、出演者から韓国という言葉がでることはほとんどなかった。韓国との「交流」事業という点が参加者に意識されているとは考え難い。

対馬における不動産が韓国人に買われていることは事実であるが、韓国人が我が物顔でそこで暮らしているわけではない。韓国人がいるのは一部の観光地であり、それ以外の大半の空間は他の日本の地方と変わらない時間が流れている。それにも拘わらず、一部の空間のみがメディアでクローズアップされる。そのことに韓国人観光客受け入れに反対である関係者でさえ不満を覚えていた。

「反日」と「親善」の相克のなかにあつて対馬の韓国との「交流」は監視・心配される。その監視・心配があるが故に、また十分な情報が相互に行き交っていないがために既述したように相互不信を招かない仕組みづくり、相互理解を深める装置づくりが存在していた。自らの活動が適切なもので、誤解をまねくものではないものとして、さらには韓国と対馬、対馬と国内との間の誤解を解くものとしてそれらの仕組みは必要なものであつた。

## おわりに

対馬・韓国間の状況を補助線に八重山・台湾間の関係を見ると、2点指摘できる。ひとつは「交流」基盤の薄さと脆さである。評価の分かれる植民地期の歴史を基盤にし、共有されやすい過去がない。共通の過去とは植民地の歴史であり、対馬・韓

26) いずれも中村八重の調査に基づく。



国のように親善とは異なる。植民地期の「交流」は、親善とは異なり、台湾側に日本の統治に一定程度肯定的な理解があるにしても評価の分かれる過去であることに違いない。

強調される具体的な事実も物理的距離が近く往来があったことのみであり、過去の掘り起こしも十分なものではない。確かに朝鮮通信使と植民地期の日常的往来を比べると、掘り起こしできる歴史がどのくらいあるかという点で、対馬は恵まれているとは言える。その差は大きい。だが、花蓮などの台湾東部の一般の市民において植民地期に台湾と八重山の間で行き来があったことを知る人は管見する限りいない。事実さえほとんど知られていないことは、掘り起こし作業が不十分であることを物語っていよう。掘り起こしするにしても「植民地統治」という問題が出てきてしまう。対馬のように全面的に喧伝される類のものではない。

もうひとつは親日台湾像の影響である。韓国と違って既述したように台湾は日本では親日的であると捉えられている。したがって台湾人観光客が増えても領土問題という点から批判されることはない。むしろ、入り込み数のアップが望まれるほどである。対馬と韓国との「交流」が監視され、心配されるのに対して、八重山と台湾の「交流」が糾弾され、歓迎されないことはない。したがって、監視や心配の対象にもそれはなっていない。

このような「交流」を促進するうえで有利な状況は、対馬と韓国の「交流」と比べてみると逆に問題を生むことになっている。つまり、関係の見直しや歴史の掘り起こしを軽視させる現状を生み出している。対馬のように相互不信を招かない仕組みづくり、相互理解を深める装置づくりがなされていないからである。

台湾人観光客が年間約6万人も訪れるにも拘わらず、既述したように対馬のようなサービス体制は作られてこなかった。両者の「交流」に関係するイベントも、旅行業者の協議会もなく、中国語の説明もほとんどない。通訳も不十分であった。歴史の掘り起こしさえ十分に行われていない。その背景には国内観光客の比重の大きさが対馬と異なっていることがあるからかもしれないが<sup>27)</sup>、それにしても対馬の対応と比べると入り込み客数が約6万人と同じ程度であるだけに、八重山における対策は少ないと言えよう。台湾系住民の一部や中国語ができる日本人からは、もっと自分たちを活用して欲しいという声さえあがっていた。親日台湾像は「交流」の発

---

27) 日本人観光客数との比率は、外国人観光客への対応を決める重要な要因であり、本稿でも指摘するように石垣への日本人観光客数の減少が台湾人観光客への対応の向上の必要性を石垣の観光業者に感じさせるものとなっている。比率の問題については今後の重要な検討課題としたい。

展を阻害する大きな一要因となっていた。

「周辺」と国民国家の関係という問題について目を移すと、八重山と台湾、対馬と韓国の「交流」の状況から「周辺」ほど国民国家という制度に影響を受けていることがわかる。国民国家の「周辺」は「周辺」という独自性を発揮しようとするが、実際は困難である。八重山も対馬も隣国に近いという周辺性を強みに独自の経済的資源、人的交流、交通網の確立を目指していた。「周辺」故の独自性の発揮だが、そのありようや体制は日本と台湾、日本と韓国の関係、さらにはそれらの関係に基づく国内の目によって左右されていた。

加えて東京や京都などと比べると、独自の情報が国境を越えて広がるということはなかった。八重山も対馬もこれらの地域の情報は正確に先方に伝わっておらず(時には存在せず)、日本のイメージのなかで観光客に想像されていた。ソウルや台北などの書店において東京や大阪、京都などの情報雑誌はたくさん作られ、販売されているが、八重山や対馬のガイドブックは存在しない。地理的な近接性が当然のことながら、対象国における情報の厚みを意味するものではない。

また情報の創出という点でも地理的近接性は有用ではない。場所の非拘束性が生まれたにも拘わらず東京等でいまだに価値が創出されるのかと植木が指摘するように台湾や韓国で流布する情報は東京などのメディアの中心地で創出されており、八重山や対馬の人々が生み出しているものではない。中心がつくるメディアのなかで八重山や対馬は意味づけられ、日本や対象国において広がるのみである。

国家内の均質性を統治原則とする国民国家と違って、前近代において権力の中心から遠い周辺は権力の影響力が距離に比して薄まるため、その自律性が確保されていた。周辺から周辺へ情報は流れ、その独自性を発揮することが可能であった。

だが国民国家の制度のなかにある現在、八重山と台湾、対馬と韓国の事例を見る限り、「周辺」の意図とは裏腹に「周辺」が国民国家の情報空間において制御し、生み出すことは「中心」に比べるとほとんどない。国内外の市場において情報や制度の創出ができない「周辺」は「周辺」であるが故に、それらの創出が可能な「中心」と異なり、一層国民国家の影響を受けやすかった。実際には独自性が発揮できそうな「周辺」ほど国民国家やその中心による拘束性が高かった。八重山と台湾、対馬と韓国の事例はそのことを浮き彫りにしている。

ソウルから遠く離れる離島巨文島を分析した丸山は、巨文島が本土への文化的求心力を強く持つものの巨文島への社会や文化にも強いこだわりを持っていることに注目する。実際、巨文島の英雄づくり運動において全国的に評価される人物を取り上げられていることから、そこに中央文化への求心力と地方文化のアイデンティテ

イの維持を見る。さらに(1)「周辺」であるが故に「中央」に加えて他の国家や文化との関係が持てる(巨文島では例えば日本)、(2)「中央」の単一的価値原理に対して「周辺」は他の「地方」や国家も視野にいたれた多元的価値体系の中に存在する、という「周辺」の特質を2点指摘する[丸山 2010]。

八重山も対馬も、「中央」から遠く、外国との関係を利用し、「中心」に対抗し、多元的価値体系のなかで自らの立ち位置を確保しようとする点では巨文島と類似している。問題はその多元的価値体系が如何に確保され、他の国民国家との関係がどのように確立されるかである。対馬と八重山の事例を見る限り、グローバリゼーションによって様々なモノが超えやすい現在ほど、情報の流通や価値の創出、他国との関係において、「中心」や国民国家の力は大きく、その多元性は対等な要素によって確保されていない。むしろ、「中心」と「中心」の結びつきがより頻繁に安易に行える昨今の状況は、その「中心」の力を強化する可能性さえも予想させる。

かつ、その「中心」は国家単位の「中央」だけではない。八重山や対馬が単に日本の「周辺」であるだけでなく、県内においても「周辺」である。二つの「周辺」は単に東京などの「中央」だけでなく、各々那覇や長崎、対馬の場合は交通の便が良い福岡も意識した活動が行われ、自己認識が存在する。「周辺」の問題は、単純に「中心」と「周辺」の一対一の関係に収斂されない。「周辺」は多くの場合、複数の「中心」と対峙することが求められ、それが「周辺」の対応を複雑にし、輻輳した自己認識を生み出している。これらの問題を「周辺」について考察する必要がある、改めて論じることとする。

## 謝 辞

本論文に関する研究は、平成16年度県立広島女子大学特定研究『『周辺』で『日本人』になること—『日本』概念の再検討』(研究代表者 李建志)、科学研究費補助金「台湾における植民地主義に関する歴史人類学的研究—『日本認識』をめぐって」(研究課題番号：17251011 研究代表者 植野弘子)、県立広島大学重点研究戦略的特定研究「越境実践と生活圏構築の文化人類学的研究—台湾と沖縄の境界領域にみる交渉と記憶から」(研究代表者 上水流久彦)、トヨタ財団・特定課題「海の東アジアが醸成する文化」の助成プロジェクト「沖縄と台湾の境界領域における越境実践と生活圏構築プロジェクト」(研究代表者 上水流久彦)、科学研究費補助金「日本「周辺」地域にみる国境変動とアイデンティティ—韓国・台湾との越境を巡って」(課題番号：21320165 研究代表者 上水流久彦)の支援を得て行った。また、

査読者より適切な助言・問題提起をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。

## 参考文献

アンダーソン, B.

- 1997 『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行 (増補版)』(白石さや, 白石隆訳) 東京: NTT 出版.

陳天璽

- 2008 「漂白する華僑・華人新世代の越境」『現代アジア研究 1 越境』高原明生・田村慶子・佐藤幸人(編), 297-324 ページ, 東京: 慶応義塾大学出版会.

橋本和也

- 1999 『観光人類学の戦略——文化の売り方・売られ方』京都: 世界思想社.

上水流久彦

- 2009 「台湾東部と沖縄先島諸島にみる越境現象——那国町を中心に」『世新日本語文研究 (台湾世新大学日本語文学系)』1: 21-37.
- 2011 「『周辺』にみる国民国家の拘束性——台湾人の八重山観光を通して」『北東アジア研究』20: 51-66.

カステル, M.

- 1984 『都市問題——科学的理論と分析』(山田操訳) 東京: 恒星社厚生閣.

丸山孝一

- 2010 『周縁文化の視座——民族関係のダイナミックス』福岡: 九州大学出版会.

又吉盛清

- 1990 『日本植民地下の台湾と沖縄』那覇: 沖縄あき書房.

村上和弘

- 2007 「<日韓交流の島>というイメージをめぐって——戦後における<対馬>観と<韓国>観」『人文学論叢』9: 1-79.
- 2009 「厳原港まつりの戦後史——対馬における<日韓交流>の利用戦略をめぐって」『日本文化の人類学/異文化の民俗学』小松和彦選暦記念論集刊行会(編), 159-179 ページ, 京都: 法蔵館.

小田博志

- 2010 「よみがえる朝鮮通信史」『エスノグラフィー入門』小田博志(編), 55-71

ページ，東京：春秋社。

奥野修司

2005 『ナツコ——沖縄密貿易の女王』東京：文藝春秋。

大井由紀

2006 「トランスナショナリズムにおける移民と国家」『社会学評論』57(1)：143-156.

大浦太郎

2002 『密貿易島——わが再生の回想』那覇：沖縄タイムス社。

内堀基光

1989 「民族論メモランダム」『人類学的認識の冒険——イデオロギーとプラクティス』田辺繁治（編），27-43 ページ，東京：同文館出版。

植木豊

1996 「資本・国家・社会的なものの『空間的発現』」『都市空間の構想力』吉原直樹（編），1-52 ページ，東京：勁草書房。

上杉富之

2004 「人類学から見たトランスナショナリズム研究——研究の成立と展開及び転換」『日本常民文化紀要』24: 1-41.